

# アドルノの文化理論

藤 野 寛

Kulturtheorie Adornos

Hiroshi FUJINO

「アドルノの文化理論」というと、取り上げられるのは、もっぱら「文化産業」論だ。ベンヤミンの複製芸術論と対比されて、「アドルノの保守性」が咎められたりする。けれども、これは、問題関心のいかにも一面的な集中だ、と言わざるをえない。「アドルノの文化理論」について考えるのであれば、少なくとも次の五つの論点は視野に収めていなければなるまい。第一に、ホルクハイマーとの共著『啓蒙の弁証法』において展開された文化産業論、第二に、「アウシュヴィッツ以降、詩を書くことは野蛮だ」という発言に現れる「文化と野蛮」の関係をめぐる歴史哲学的考察、第三に、モデルネにおける美学・芸術理論、第四に、自然支配をこととする科学技術的合理性への批判、最後に、フロイトを受けての昇華の理論である。もちろん、アドルノその人にとってはこの五つの問題点は相互に分かちがたく結びついていたはずなのだが、その全体的連関は必ずしも明らかであるとは言えない。以下においては、アドルノの文化理論を全体的・体系的に理解することがめざされるが、考察の出発点として「文化産業」という言葉を取り上げ、それがいかなる問題をはらんでいるのか、から考えてみたい。

## ・問題としての「文化産業」という言葉

アクセル・ホネットは「開き出す批判の可能性について 社会批判をめぐる目下の論争の地平からみた『啓蒙の弁証法』」と題された論考において、この著作が読者に及ぼす魅惑の理由を問い尋ね、その所在を、一つには「交叉語法」の内に見出し出している。すなわち、「従来、意味の上で対立関係に置かれていた言葉を、一個の言い回しの中で一緒に使ってしまうような表現<sup>1)</sup>」のことである。「自然史」と並んで、「文化産業」という言葉がその代表例であるとされる。たしかに、「産業」という言葉は「軍需産業」とか「ハイテク産業」といった言い方においてこそ座りが良い。かつて「文化産業」という表現に初めて遭遇した人は、今日もし「生命産業」という表現がなされるとしたら抱かれるであろうと類似の違和感を抱いたことだろう。「文化」という言葉と「産業」

という言葉のこの相性の悪さ それは、何に由来するものなのか。

### ・ 聖なるもの：「文化」

問題は「文化」という言葉にかかる強い負荷 ー ただし、肯定的な ー にある。日本語でも、例えば「文化人」とか「文化勲章」、「文化の日」といった言葉を思い浮かべれば、「文化」なるものが、どれほど価値の高い、いや高尚なものに見做されてきたかを感じ取ることが不可能ではないだろう。ドイツ語の場合、しかし、その度合いは遙かに高くなるようだ。その点を鮮やかに示しているのが、ドイツの精神史において一度ならず持ち出されてきた「文化 - 文明」の対比である。西側、具体的には、フランス・イギリス・アメリカの「文明」に、ドイツの「文化」が対置される。「文明」の目印になるのは、物質主義とその具体性としての科学技術であったり、民主主義とそれを支える平等の理念であったり、さらには、個人主義とそれに基礎を置く契約主義であったりする（「モデルネ」と形容されるものと、ほぼ重なるようだ）。つまり、西からは物質文明、東からは野蛮に挟撃されつつ、文化はその狭間にきわどく存立する、というわけだ。その際、「文化」の核をなすのは、「精神」 ー 必ずしも、すべての人に共有されているとは限らず、もちろんすべての民族によって共有されているはずのない ー 高くも深い「精神」なのである。

「文化」を持ち上げる者にとって重要なのは、その内容上の高尚さ・深遠さであるとともに、それが一定の限られた人によってだけ共有されるものである、という点である。ドイツ文化であれば、それはドイツ人によって、そしてドイツ人によってのみ共有される。つまり、「文化」には、統合する力、同質性を虚構する働きが期待されているのだ。それは、個人主義とそれに由来する分裂を克服する力である、ということであり、しかもその克服は「契約」や「民主主義」といった回りくどい手続きを必要とせず、無媒介的に、一挙に実現される。「文化」を称揚する者は、常に、「一体性」「同一性」に色目を使っているのだ。（その意味では、「多文化社会」という言葉は、それ自体がすでに一つの挑発である、と見ることもできる。「多文化社会」を「不協和音」の同義語として受け止めることは ー だから良い、とか、悪い、とかいう価値判断の手前でなら ー 必ずしも、ただちに叱責されるべきことではないだろう。）

興味深いことには、ドイツ人が西の「文明」に自らの「文化」を対置するのと同型の反応が、地球のあちこちで見い出される。日本では「和魂洋才」と言われた。「西洋（の科学技術）文明」を脅威として受け止めた人々が、これに日本の「精神文化」を対置することで防衛戦を試みたのだ。「文化」概念にあつてのポイントは、ここでも、内容の上での「高尚な精神性」であるとともに、民族的「同一性」を固めるという機能なのである。

この対照関係にあつて、「産業」が「文明」の側に配属されることは、一目瞭然だろう。それは、あからさまに物質的であり、下品だ。だからこそ、「文化産業」という言葉は挑発なのである。それは「文化」を心の支えとして有り難がり崇め奉る人の神経を逆撫です。そこには、日本語で

「皇室産業」と言うのと、ある種の人々が「聖なるもの」に対する暴行、冒瀆だと感じるであろうのと同じ事情があるのではないか。ただ単に「大衆文化」と言うだけの場合とでは、そのショック効果の度合いが比べものにならないほど大きいのである。

ちなみに、「文化」崇拜に対する揶揄・挑発というこの観点からは、「アウシュヴィッツ以降、詩を書くことは野蛮だ」という有名な言葉にも光をあてることが可能である。この言葉は、1949年にアドルノが発表した「文化批判と社会」という論考の最後の段落に現れる。1949年とは、敗戦国ドイツの人々が、精神的に打ちのめされた状態から立ち直ろうとし、とにかく生活の再建に向かって前に踏み出すことに躍りになっていた時期である。その時、物質的生活の上での悲慘を耐えるためにドイツの精神と文化の伝統の優秀さに訴える言説が、主として知識人によって流布された、と想像することは難しいことではない。

まさに、そういう言説をこそ標的にして、アドルノは、自分たちが「文化と野蛮の弁証法の最終段階」にあるという認識をぶつけたのである。この点については、シュネーデルバッハによる次のような簡にして要をえた指摘がある。「文化と文明の区別」に関して、シュネーデルバッハは次のように言っている。

「ごくありふれた形態では、この区別は、ドイツにおいて、第二次世界大戦後にもなお見い出される。文化、それはゲーテ、ブロック＝フレーテ、弦楽四重奏、オペラの定期会員、そして高価な赤ワインであり、それに対して、文明とは、鉄道、映画、週六日労働、コココーラ、そして総じてアメリカ人を意味しているのだ。第二次世界大戦後、次の点は明らかだった。この文化なるものは、ヒトラーとホロコーストを阻止しなかったのだ、ということ

その時に、アドルノはこう言ったのだ「アウシュヴィッツ以降、すべての文化はゴミ屑であり、その後にもなお詩を書くことは野蛮だ」と。そのようにして、終戦後、もしも、よにもよって恐るべき出来事の共犯者であり同調者であった人々の口から、再び文化の語が呪文のように唱えられたならば、ものを考える人々にとって、それは、空疎で不誠実なものに思われずにはすまなかったのだ。<sup>2</sup>」

要するに、「文化産業」という言い方をすることは、それをもって「文化産業」なるものを批判するという意図があること自体まで否定するものではないとしても、先ずはむしろ、「文化」を崇め奉る人々に冷水を浴びせかけることをこそ意図するものなのである。その点を確認することは、「文化産業」論のゆえをもって、アドルノを、文化に関する保守主義者と見做す誤解の余地をふさいでおくためにも、大切な点である。「文化」が産業との癒合によって汚染されることがゆゆしい問題なのではない。文化論においてもアドルノは唯物論者なのであり、物質性から切り離された「文化」を求めているのでもなければ、「産業」化されてしまった「文化」を、あらためて純化せよ、と求めているのでもないのだ。

アドルノは、非文化に対して文化を擁護する「文化（の貴族）主義者」ではない。彼は文化と野蛮の間に「あれか／これか」の関係を認めない。そうではなくて、文化そのものの中に野蛮を見出す。それを表明するのが「アウシュヴィッツ以降、詩を書くことは野蛮だ」という言葉の直前に出てくる「文化と野蛮の弁証法」という捉え方なのだ。この点をさらに丁寧に見てゆこう。

### ．「野蛮としての自然」と文化

「文化」についてのごく常識的な捉え方は、それを神聖視はしないにしても、「自然」との対照関係において捉え、その上で、「自然から文化へ」のプロセスの内に歴史の意味（「進歩」）を見出す、というものだろう。その時、「自然」に「野蛮」のイメージが重ね合わされるのだ。つまり、「自然状態＝野蛮」である、という洞察が、そもそもの出発点にある。ルソーではなく、ホブズが考えたような「自然状態」。そして、まさにこの前提との対比においてこそ、「啓蒙（文化）が野蛮に反転する」という『啓蒙の弁証法』のテーゼはそのショック効果を発揮するのである。「野蛮としての自然」に対するに「野蛮としての文化」。

では、「野蛮」とは何か。その属性の一つが「暴力性」であることには異論はないだろう。つまり、「文（明）化」とは、脱「野蛮」として、脱「暴力」という面をもち、「文化」がすなわち「自然支配」である、とは、自然の属性の一つであるとされる暴力性を抑えること、自然に手綱をつけさらには飼い馴らすこと、を意味するのである。

外部の自然を思い浮かべる場合、そのイメージ化は容易なはずだ。自然の暴威にさらされ翻弄されるがままになっている無力な人間が、その野蛮からの脱却を求めて始めたいじらしい試みが、「文化」に他ならない。「衣食住」という日本語は、外的自然を支配する試みとしての文化、というこの論点をイメージするのに恰好の言葉だ。寒さをしのぐための衣料品、飢えをしのぐための食料、雨露をしのぐための住居。無論、この段階では、人間の側の対応は受け身に終始しているから、「支配」という言葉はさしあたり強すぎるわけだが、しかし、山を崩し木を切って家を建て、田や畑を作って農作を始めるとき、それは、すでに十分に自然への介入であり、支配の一種であるとは言えるだろう。

しかし、「自然状態＝野蛮」について考える上で、より重要なのは、「自然としての人間」である。より詳しく言えば、人間自身が自然存在として野蛮である、という論点である。しばしば人間の「攻撃性」と呼ばれるものを思い浮かべるとよい。「自然支配としての文化」と言う場合、「内的自然としての欲求（欲動）の飼い馴らし」というこの点を素通りしてすますことはできない。食べたい、飲みたい、犯したい、殺したい のを我慢するという、あるいは、その実行を先送りするという。フロイトの言葉を使えば、「欲動断念としての文化」である。

この二つの側面を合わせて、要するに、「文（明）化」とは、「野蛮としての自然」との闘いなのであり、もし、「文化」を有り難がることに正当な理由があるのだとすれば、それは一にかかって、

「文化」が「野蛮としての自然」の馴致、その意味での「支配」に首尾よく成功しつつあるから、でなければなるまい。

「アウシュヴィッツ以降、詩を書くことは野蛮だ」という発言が、この「野蛮の馴致」という点で文化が何の役にも立たなかった、という痛苦的認識に基づくものであることは、疑いない。けれども、もしそれだけだとすれば、アドルノは「アウシュヴィッツ以降、詩を書くことは野蛮に対して無力だ」と言えばよかったのだ、ということになるだろう。しかし、アドルノは、単に「文化」が「野蛮」に対して無力だ、と言っているだけなのではない。「文化」が「野蛮」だ、と言っているのである。それは、どういう意味か。

## ・文化と野蛮の弁証法

「文化」は、自然連関への埋没からの脱却とともに始まる。自然過程への内在から脱出し、これから距離をとること。それは、否定的に言えば、自然から疎遠になることだ。「疎外」と言われる。自然に安らぎを見出し自然を故郷と感じる人は、哀悼の思いとともに文明化のプロセスを振り返るだろう。郷愁である。けれども、このようにして置かれる隔たりこそが、人間に対して大きな力を与えもするのである。何のための力か。自然支配の力である。自然連関にすっかりはまりきっていたのでは、これに力を及ぼす余地など生まれてはくるまい。これを変える力など手には入るまい。距離を置くこととは疎遠になることであるとしても、それは、支配を可能にするような疎遠化なのだ。

自然から距離を置く、という場合にも、それは、外部の自然のみならず、内的自然にもあてはまる。「反省」と呼ばれる。もし、人間が反省という隔たりを何ら置くことなく欲動に従い、その充足をはかるなら、つまり、「快感原則」一本槍で生きようとするれば、没落は必定だろう。「現実原則」を採用することとは、自らの欲動に隔たりをおいて反応・対処することである。

自然「支配」といい、欲動「断念」といい、そこに暴力性の影がさすことは、すでに見まがいようがない。動物をペットとして飼い馴らすことを考えるとよい。それは「野蛮」の飼い馴らしを「野蛮」をもってする、ということ以外の何ものでもないだろう。「文化」の中にはすでに始めから「野蛮」がインプットされているのだ。

『啓蒙の弁証法』という著作の主張の核は、この「文（明）化」を可能にした合理性への反省的批判にある。つまり、合理性は人間を神話的な世界　その恐怖や暴力　から解放する上で大いに貢献したわけだが、しかし、その文明化のプロセスは、同時に、幸福の断念という高価な代償を支払ってのものだったのではないか、というフロイト的洞察が土台にある。とはいえ、では、神話的世界では、人は今よりも幸福に生きていたのか、といえ、そんなはずはない。文明の歴史を頽落の歴史として描き出すことがこの著作のねらいなのではない。文明化による獲得は、単なる獲得ではすまず、同時に何らかの喪失でもあらずにはすまないのだということ、そして、その喪失は今

や破局につながりかねないほどの脅威と化しているのだ、ということが、要点なのだ。

科学技術の進歩は、人間に、巨大な自然支配の能力をもたらした。その能力が生み出しうる「野蛮」を直視することは、新しい世紀にとって、もっとも重い課題となることだろう。その「野蛮」が、人間が動物と共有しているかもしれない自然現象としての「野蛮」でないことは言うまでもないが、「文化」の営みの失敗、その「本来性」からの逸脱ゆえの「野蛮」なのでもない。そうではなくて、「文化」にそもそもの始めから内在している「野蛮」、自然支配能力としての高まりの極限において爆発的に出現するような「野蛮」、文化的存在としての人間にして始めて生み出しうるような「野蛮」、要するに、文化現象としての「野蛮」なのだ。「ガス室」と「原爆」はその代表例にすぎない。

考えてもみよう。ナチズムは、アウシュヴィッツに象徴される「野蛮」のシステムにおいて大量虐殺をおこなったわけだが、それは「文化」の営みとして遂行されたのでなくして何であったろう。最新の科学や技術が動員されただけではない。どれほど多くの文化（人）が人々の攻撃性・好戦性を煽り立てたことか。その虐殺行為を「人類の進歩」の大義名分（「優生思想」！）のもとに正当化しようとした思想・言論を思い浮かべることは、造作もないことだ。アウシュヴィッツ以降、「文化」は、もはやいささかも無垢ではありえない。文化と野蛮の癒合を見ることなく、文化を理念として引き合いに出すことは、おめでたさと知的怠慢を証するものでしかない。そこからして、「詩を書くこと（文化）」は、もはや「野蛮（自然）からの脱却」ではなく、それ自身が「野蛮」だ、とアドルノは言い切るのである。

### 。「昇華」の両義性

「自然状態＝野蛮」からの脱却のプロセス、としての「文化」という場合、こうして、具体的には、まずは、一方で「科学技術」が、他方で「道徳」が考えられる。そして、カントが代表的に示しているように、「野蛮の克服」という課題は、「理性」という能力に割り当てられてきた。カントは、この能力を「理論理性」と「実践理性」という形で差異化し表現している。では、人間の関心事としての「真善美」のうちの「美」については、どう考えれば良いのだろうか。『判断力批判』のテーマである「芸術」「文化」と聞いて多くの人が真っ先に思い浮かべるであろう「芸術」、そして「詩」がその一例であるところの「芸術」については、どうなっているのか。

「内的自然支配＝欲動断念」としての「文化」、という視点から「芸術」について考えるための手がかりも、フロイトその人が与えてくれている。「昇華」の理論である。「昇華 (Sublimation)」とは、文字通り「崇高・高尚 (sublim) にすること」である。つまり、充足を求める欲動の対象を、直接的に性的なものから、より「高尚」な何ものかに変える（高める）こと。そこで得られる充足は、従って、「代用満足」と呼ばれる。フロイトにあって好感がもてるのは、昇華の結果として得られる代用満足を、決して理想化しない点である。フロイトは言っている。

「この種の満足は、荒々しい一次的欲動の動きを充たした場合の満足に比べると強烈さの点で劣る。われわれの肉体まで揺さぶり動かすことはないのだ。<sup>3</sup>」

ということは、芸術活動を通して昇華という形で代用満足が得られたとしても、それは、「一次的欲動を充たした場合」に比べて「欲動断念」の影を落とさずにはすまない、ということである。ここに「昇華」の両義性は確認される。それは一方で、たしかにそれなりの欲動充足（代用満足）ではあるのであって、力ずくの抑圧よりはましなのだが、他方でしかし、「真の」欲動充足を妨げるものだ、とも言わねばならないのである。例えば、「人を殺したい」という欲求が抱かれるとする。それを「けしからん」と押さえつけるのが道徳であるとするれば、ボクシングの練習でもして攻撃のあり方と対象をずらそう、というのが昇華だろう。ボクシングではなく、例えば文学の創作へとずらされるなら、昇華の度合いはさらに高まるということになる。それが、「よまし」な欲動断念である、と認めることは不可能ではないとしても、欲動断念であることには変わりはない。いかに洗練された形をとるとはいえ、それは、ある意味では 次節でみどころの 欲動「操作」の一種とも見做しうるものなのだ。

そして、「昇華」を手放して肯定しない点、高尚志向の文化愛好家（スノブ）には決してならない点で、アドルノは、もちろんフロイトの精神を共有する。

「フロイトは...欲動断念を、現実反する抑圧として否定すべきか、文化を促進する昇華として称賛すべきかで揺れ動いている。この矛盾の内には、文化そのもののはらむヤーンの性格のいくぶんかが客観的に生きている。<sup>4</sup>」

「文化そのもののはらむヤーンの性格」というこの指摘には、いくら注目してもしすぎることはないだろう。

それにしても、「代用満足」ではない「真の」充足とは、何を意味するものなのだろうか。「一次的欲動の動きを充たすこと」なのだろうか。人間の「一次的欲動」とは、それほどにも無邪気に肯定されてさしつかえない結構な何ものかなのだろうか。

人間の欲求（内部の自然）を手放して肯定し、ともかくそれを自由に解放してやりさえすれば、健全にして真なる(?)充足が実現される、などと呑気なことを考える人では、アドルノは、決してなかったはずである。（アドルノは『エロスと文明』のマルクーゼではない。）それをするには、アドルノは、芸術経験の内に「骨折り（Anstrengung）」を求めすぎている。きわめて印象的なことには、道徳に対してはそのかすかな抑圧性にも敏感に、場合によっては嘲笑的にすら反応するアドルノが、こと芸術の問題となると、おそろしいまでに「厳格主義的」なのである。アドルノが高く評価する芸術作品を思い起こしてみるがよい。シェーンベルクやヴェーベルン、ベケットやツェランなど、その作品は、いずれも強度の知的緊張を要するものばかりであって 適意と呼ぶにせよ享受と呼

ぶにせよ 易々と快の感情を経験するということからこれほどにも遠い作品たちもない、と言わねばならないのである。(アドルノ自身の散文も、これに加えてよいだろう。⁵)

「物質的な生の状況に照らして文化を吟味する<sup>⁶</sup>」という印象的な言い方をアドルノがしている箇所がある。「文化崇拜」ならぬ「文化批判」ということの具体的内実を指し示す言葉であろう。「欲望」を「昇華」の名のもとに「精神」化し、非「物質」化することに文化の意味があるわけではない。文化を自然からとことん切り離そうとする、昇華しようとする試みは、野蛮に反転したのであった。文化の自律性(Autonomie)が追求されるとしても、それは文化の「自然への付着性(Naturhaftigkeit)」に即してなされねばなるまい。上記の言い方を繰り返せば、文化は、物質的な生の状況に照らして吟味されねばならない、ということだ。(それは、文化は物質的生の次元を「反映」していなければならない、という主張とは、イコールではないだろうが。)しかし、他方で、文化が物質的欲求の直接的充足に仕えるものではないことも、また明らかだろう。一方に、物質的欲求の充足の直接性と、他方に、その忘却、それとの断絶があり、その狭間に、文化は定位する。

要するに、「昇華」と言うかわりに「真の欲動充足」と言ったところで問題が解決するわけではないのだ。両義性は残る。「文化産業」は「欲望」を「操作」し「真の欲動充足」から逸らせる、と断罪しておればすむ話でもないのである。

### ・自律と欲望「操作」

アドルノは、一方でナチズムによる文字通りの暴力的支配、野蛮を眼前に見据えて『啓蒙の弁証法』を書きすすめたわけだが、同時に彼は、アメリカ合衆国の大衆文化の実態をも眼前に見ていた。『啓蒙の弁証法』の文化産業論の特異さは、著者たちがアメリカ合衆国において体験することになった文化産業の実態と、ナチによる文化政策とを、啓蒙が示す「同根」の「症状」であると捉えた診断にある。ヒトラー、ゲッベルスが、新しいマスメディアを大衆動員、国民統合のために巧妙に用いる術を心得たという以上の共通点が、はたしてそこにあるのかどうか 文化産業論の成功は、この診断の説得力にかかっている、と言っても過言ではないだろう。

その際、アドルノは、アメリカ合衆国の大衆文化を「遅れた」現象として蔑視していたのではない。「遅れた」国の問題ならば、「先進国」出身者は他人ごとだと言ってすましていられただろう。そうではなくて、そこにまさにヨーロッパの未来が映し出されている、その意味で「進んだ」現象であると診断し、そのもとにこの「文化産業」論を展開していたのである。アドルノにも、反アメリカ主義的発想があることは否定できない<sup>⁷</sup>としても、それは、遅れたものを見下してする反応ではないのである。

とはいえ、アメリカ合衆国の、そして戦後ドイツの「文化産業」には、さしあたり、「直接の暴力」はない。「野蛮としての文化」とは言っても、この意味での「野蛮」を意味するものではない。そこでの「野蛮」の概念は、先ずはやはり、フロイトを介して理解されるべきもの、つまりは「欲



動断念」、それも欲望を「操作（マニピュレーション）」することを通しての断念である、ということになるだろう。

「操作」されるのは、「欲動」「欲望」「欲求」である。「欲望の自発性」に「操作された欲望」が対置される。では「欲望」は誰によって、どのように操作されるのか。この問いについては、「自律 - 適応」という対概念を背景に置いて考える必要がある。さらに、外部から圧力が加わってくる時になお自律を確保しようとするれば、そこでは抵抗が不可欠となるから、これをさらに「抵抗 - 迎合」という対概念へとパラフレーズして考えることが可能となる。

さて、フロイトは「(現実への) 適応 = 欲動断念」と見做した。これを逆にすると、(真の) 欲動充足は、適応の拒否、現実への抵抗を通して始めて可能になる、ということになるだろう。適応か抵抗か、という社会学・政治学のカテゴリーが、こうして、「享受 (Genuss)」という美学のカテゴリーと結びつく。「自律 (Autonomie)」は、感性的快を押さえ込むことによってではなく、それが充たされることを求める力によって実現される。自律に、歯を食いしばって確保されているだけではなお欠如のあることを示す、快の次元が加わるのだ、とも言えようか。

芸術の自律性という論点に関して、アドルノの立場は、さしあたり、両義的である。一方で、芸術の自律性をおめでたく信奉する立場には、彼は無い。つまり、高尚な芸術に対して低俗な経済活動、精神に対して物質（お金）という二元論は却下する。芸術もまた、社会による制約を免れない。しかし他方で、経済や政治のしもべになることも、アドルノは芸術に対して認めない。「作品の論理<sup>8</sup>」ということを彼はしばしば口にするが、それは「市場の論理」に対置されているわけだ。そして、その対峙こそが、社会に対する批判という働きを、芸術作品に可能にするものであるはずなのだ。

ところが、文化産業は、芸術に関わりながら、それが従うのは、「作品の論理」ではなく「市場の論理」である。アドルノによれば、文化産業がたれ流しているのは、「欲動充足」のふりをしつつ実はそれではないところのもの、まがいものの「エセ欲動充足」である。大衆を真の欲動充足から逸らせることとしての「操作」が行われる。大衆の欲求は「本来の対象」ならざるものへと逸らされ、したがって「真に」充足されることはありえない。そして、「真の充足」が得られない時、その不満は、本来ならそれを阻む「体制」に対する抵抗・叛乱という形で表現されるはずであるのに、文化産業は、巧妙にもそこにニセの充足対象を差し出し、もって抵抗の力を骨抜きにしようするのである。「娯楽 (アミューズメント)」のはたす機能とは、まさにそれであろう。「娯楽作品」は、人々にお手軽な欲動充足の手段を提供し、そのことによって、本来あるべき欲動充足を阻む役割をはたす。「操作」するのは誰か、という問いへの答えは、すでに明らかだろう。それは、「現存体制 (エスタブリッシュメント)」に他ならない。

## . 文化と管理

アドルノが、自らが生きる資本主義社会を「管理社会」と概念化する上では、一つの独特の時代診断がそれを支えている。つまり、資本主義は自由競争を原理とする自由主義段階をすでに後にし、今や、市場も国家の全面的コントロール下に服している、というのである。国家資本主義という捉え方であって、そこでは国家による管理支配と資本主義という経済のシステムとが、前者に後者が従属する形でぴったりと重なり合う、と捉えられる。そこから生じる重大な帰結は、ナチズム体制と戦後西ドイツの社会体制が切れ目なく地続きのものとして解釈可能になることである。戦後の西ドイツの社会も「管理社会」として、ナチズム体制と共通の性質を保持し続けるもの、と見做されることになる。

例えば、アドルノは、「文化と管理」というそのものずばりのタイトルをもつ論考の中で次のように言う。

「かつて言われたような意味での管理の装置から管理された世界における管理の装置への移行という事実、つまり、かつては管理がおよんでいなかった領域にまで管理の装置が進入してきているという事実は、純然たる支配形式としての管理それ自体に内在する膨脹と自立化への傾向だけから説明しようとしても、容易ではない。責任があるのは、独占化が進行しつつある中で、交換関係が生活全体にまでおよんで膨脹しつつある、という事態だろう。等価物による思考が、すべての対象の通約可能性、つまり、抽象的規則へのすべての対象の包摂可能性をつくり出し、その限りにおいて、自ずから、管理の合理性と原理的に親縁関係にある合理性を生み出しているのだ。」<sup>9)</sup>

見られるように、ここでアドルノは、管理を交換関係に重ね合わせて考えている。管理社会の存立は、交換関係の全面化から説明されるのである。こうして、文化産業の制覇は管理社会にその一部分として組み込まれることになる。例えば、『啓蒙の弁証法』の中には「文化産業の全体性<sup>10)</sup>」というような言い方が見られる。「全体性」とは、外部がないことを意味するだろう。

アドルノは、ある意味ではきわめて素朴に、現象と本質の二元論を採用している。ただし、その場合、本質とは、現象の彼方、別の次元に存在する何ものかではない。そうではなくて、諸現象の媒介された全体こそが、本質と見做されるのだ。「媒介」とは、もちろん、弁証法の用語であり、部分が互いにどのように媒介され合って全体を形成しているのか、また、その部分と全体とが互いにどのように媒介され合っているのか、を分析することこそ、弁証法的認識の課題に他ならない。部分に、個物に、現象に拘泥している限り、本質への洞察は得られない、というわけだ。これは、アドルノによる実証主義批判の核にある考えだ。しかし、それだけであれば、いかにも陳腐な全体論的認識論にすぎないことになる。実証主義の陣営にも、全体論の立場を採る人はいるだろう。

ところが、アドルノの全体論の特殊性は、その全体なるものが非真だ、と言うところにあるもちろん、その場合の「非真」とは、「あるべからざるもの」という価値の概念なのであるが。その結果、アドルノの全体論は、全体の外部を志向するものとなる。いや、それだけが関心事なのだ、と言ってもよい。（そこから、言語の外部を志向するヴィトゲンシュタインとの同型性が出てくるのかもしれない。）アドルノの関心の対象は、存在するものの全体の内部には存在しないことになる。彼の思考は、形而上学的な、いや神秘主義的な色合いをも帯び始めることになるのだ。全体としての社会の認識という課題に携わりながら、その実、関心は、その外部にあるわけだ。

そして、その外部なるものへの回路が、アドルノにあっては、唯一（個人の内面における？）芸術経験においてのみ開かれている、という話になっているのではないかと、という解釈（あるいは、嫌疑）が生じるのである。文化産業が大惨事となるのは、まさにこの文脈においてである。つまり、もし、文化産業が、事実たしかに全体を牛耳るにいたっているのだとすれば、アドルノにとって辛うじてなお残されている、全体の外部へと通じる唯一の回路が塞がれてしまう、ということになるからだ。

「文化批判と社会」の中でアドルノはこんなことを言っている。

「全体（としての社会）の網の目は、交換行為のモデルに従って、どんどん緊密に編まれてゆく一方だ。全体は、個々人の意識に、ますます僅かしか避難の余地を許さなくなり、ますます徹底的に、それを前もって型にはめてしまい、その意識から、いかなればア priori に、差異の可能性を切り落としてしまう。差異は、提供されるものの画一性の中であって、（単なる）ニュアンスへとおちぶれてしまう。」<sup>11</sup>

アドルノが、彼が「管理社会」と呼ぶものをどのように感じ取っていたかが印象的に描き出されている箇所だ。それは「交換原理」の支配する社会なのではあるが、しかし、すべてはあらかじめ決定され（計画され）供給されるものは画一化されてしまっているのである。「同一性原理」が貫徹した社会だ、と言ってもよい。それは「管理社会」と呼ぶにふさわしい冷たい社会のイメージである。

## ．「管理社会」と「市場」

しかし、「管理社会」概念は、本当に しばしば「熱い社会」と表現されることもある 資本主義の現実を捉えているのだろうか。社会を管理し欲望を操作するということと、自由競争を通して最大の利潤をあげるということとは、それほどすんなり一致・両立する関係にあるのだろうか。

もちろん、マスメディアが、国民統合に動員されるというのは、ありうることだ。その可能性は、常に開かれている。政治的支配者にとって、自らのツルの一声で国の全体を動かすことができる、

というのは甘美な夢想だろう。その余地がなお残されているのは確かであるとしても、しかし、少なくとも民主主義社会にあっては、マスメディアは、政治からの自立を確保し、利潤追求の原理にも従って動いているはずだ。マスメディアを操作・動員する政治、というよりも、むしろ、政治をも視聴率獲得の道具とするマスメディア、と捉える方が、現実に近いのではないか。

そして、そもそも、「文化産業」の第一の関心事は、本当に「体制の維持」なのだろうか。「産業」が「産業」である限りにおいて、むしろ「利潤追求」こそ第一の関心事なのではないのか。なるほど、「利潤追求」は「資本主義」という体制の中でのみ可能なのだとすれば、その体制を維持することは、利潤追求にとって必須の前提条件である、とさしあたりは言える。そして、「冷戦」と呼ばれたこともある二つの体制間の緊張関係のもとにあっては、体制維持は「産業」にとっても重大な課題であったかもしれない。しかし、今や「市場経済」体制が「一人勝ち」してしまった状況にあっては、もはや「利潤追求」のみが、しかも地球規模でのそれが剥き出しの関心事と化してしまっている、というのが、実情ではないのか。

「文化産業」は、支配のために人々の欲求を「管理」「操作」するなどという辛気臭い行為には、実は、それほどの利害関心を示すものではないのではないのか。そうではなくて、むしろ、人々の欲求を「刺激」することこそ、その関心事なのではないのか。もちろん、欲求を刺激することは人々を愚鈍化することであり、そのことを通して結果的に、支配を側面支援しているということはあるかもしれない。しかし、それは、あくまで副次的産物なのであって、主目的ではないはずだ。例えば、旧東ドイツのような徹底的に管理された国家において 現実には、社会主義国家だったのだからあり得なかった想像だとしても 「文化産業」が栄えることは、想像可能だろうか。文化産業にとっては、管理社会は利益のあがらない、歓迎されない社会なのではないか。また例えば、韓国で日本文化（へ）の開放政策がすすめられているというが、これも、一つには利潤追求という観点から推し進められてもいるものであって、大衆管理・大衆操作という観点から生まれてきたものではないだろう。

文化産業は欲求を操作する、と言われる。操作するとは、しかし、すでに存在することが前提された欲求を操作する、ということだろう。しかし、自発的な欲求が前もって存在するところでは、そのトータルな操作というのは不可能なのではないか。それをしようとすれば、自発的な欲求は根絶やしにした上で、あらためてにせの欲求を人為的に作り出すという操作が必要になるのではないか。実際、アドルノも「消費者の欲求を産み出す<sup>12)</sup>」というような言い方をすることがある。もし仮に、それが完璧に実行可能であるとすれば、「操作」は完遂される、ということになるだろう。

けれども、この想定にはリアリティはあるまい。それというのも、人間の欲望は、倦むことなく膨脹しうるのみならず、思いもかけない方向に展開しうるものなのだから<sup>13)</sup>。だからこそ、競争の余地も生じるのだ。すべて先が読めて、先手先手で「操作」することが可能なところに、競争は生じるまい。そこには、もはや自由競争は成立していないのであり、むしろ、計画経済さえあればよい、という話になってしまうだろう。

そもそも、文化産業によって供給されるパターン化された作品をもっぱら受動的に享受するだけの観客・聴衆（消費者）という反復される図式も、疑問に付する余地があるのではないか。人々の欲求にしても、文化産業の目論見などこ吹く風とばかりに、その裏をかき、あるいはその先を行って、充足のためのゲリラ戦を展開している、というのが現実ではないのか<sup>14</sup>。サブカルチャーが、例えばそれだろう。あるいは、コンピュータメディアによる様々な 犯罪的なそれも含めた 欲動充足。

そう考えると、そもそも「操作」理論は、誤った楽観的前提に依拠しているのではないか、という疑問が浮かんでくる。つまり、大衆の欲望は、操作によってわきへ逸らされることがないならば、つまり「真に」充足されるならば、例えば「幸福」とも呼ばれるような望ましい結果に行き着くのであって、それが阻まれる時、例えばフロイトにおいて「神経症」がそれであったような否定的な事態へと帰着してしまうのだ、という前提である。しかし、そもそも、欲求に関して、充足か断念か、という二者択一、抑圧か解放か、という二者択一は正しいのだろうか。そうではなくて、例えば、人間の欲動そのものの否定性ということが、やはり、考えに入れられなければならないのではないか。

そして、もし、文化産業論に関して、「産業」を悪玉視し「欲求」を善玉視することが一面的であることを認めるならば、それに対応するように、「産業」というより「市場」 に関して、その積極的意味が見い出される余地が浮かび上がってこないだろうか。つまり、「市場」というと、ただちに、すべての質を捨象して均質化・数量化し、もって交換価値に還元してしまう諸悪の根源である、とでも言わんばかりの拒絶的な条件反射的連想が働くが アドルノが「非同一的なもの」の救出と言う場合にも、「同一化」する市場の働きに対抗して言われていたことは明らかだ しかし、同時に、少なくとも、「質」というカテゴリーが、もともと中世においては身分の階層構造と結びつく差別のカテゴリーでもあった事実を思い起こす必要があるのではないか。市場こそは、すべての人に 単なる労働力商品としてであれ 参加の可能性を公正に開くものだったのだ。人がとりあえず誰でも参加して自由に競い合うことの出来る場 それが「市場」である。

「商品」となることは、芸術作品にとって、自由な流通への解放でもあるわけだ。例えば、「芸術品市場」がなくなれば、芸術家は再びパトロンによる庇護を必要とする境遇に逆戻りするだけだろう 例えば、東ドイツのような社会主義国では、国家が、きわめて恣意的でかつ抑圧的なパトロンになったのだった。その点を踏まえないアドルノではなかった<sup>15</sup>。

フロイトが言うように「人間は文化なしに生きることはできない」のだとすれば、しかし同時に、文化は野蛮と本性上、切っても切れない関係にあるのだとすれば、その点へと徹底して反省を及ぼすことこそ、文化に随伴する文化批判の課題であろう。「アウシュヴィッツ以降、詩を書くことは野蛮だ」という言葉は、その点へと注意を喚起するために選ばれた一撃なのである。より具体的には、文化「崇拜」に逆戻りするのではないような仕方、文化「産業」への アプリオリな断罪ではないような 批判を展開することは、アドルノ以降怠られてきた、それゆえなお今後にも属する

課題であり続けているのではないか。

(ふじの ひろし・本学経済学部助教授)

注

- (1)Axel Honneth: Über die Möglichkeit einer erschliessenden Kritik. Die 》Dialektik der Aufklärung《 im Horizont gegenwärtiger Debatten über Sozialethik, in: Das Andere der Gerechtigkeit, Frankfurt am Main 2000, S.85.  
この論文は邦訳されている(『思想』、2000年、第七号)
- (2)Herbert Schnädelbach: Das kulturelle Erbe der Kritischen Theorie, in: Philosophie in der modernen Kultur, Frankfurt am Main 2000, S.111f.
- (3)Sigmund Freud: Das Unbehagen in der Kultur, in: Studienausgabe, Band 9, Frankfurt am Main 1982, S.211
- (4)Theodor W. Adorno: Minima Moralia, in: Gesammelte Schriften, Band 4, Frankfurt am Main 1980, S.66.  
(三光長治訳『ミニマ・モラリア』、法政大学出版社、1979年、77頁)
- (5)アドルノの文体の晦渋さは、一つには、自分の書いたものが「商品」として流通してしまうことに対する居心地の悪さに発するものなのではないか。商品であることに抗うような何ものかを市場に送り出さなければならない、というジレンマ。それは確かに、「消費」されることからアドルノを護っているとは言えるが、同時に「崇拜」される原因を生み出してもいるのである。
- (6)Theodor W. Adorno: Kulturkritik und Gesellschaft, in: Gesammelte Schriften, Band 10・1, Frankfurt am Main 1977, S.12
- (7)その印象的な一例をマルティン・ゼールが紹介している。(Martin Seel: Dialektik des Erhabenen. Kommentare zur 》ästhetischen Barbarei heute《, in: Vierzig Jahre Flaschenpost: Dialektik der Aufklärung 1947 bis 1987, S.18.) アドルノはこう言っているのだ、「何百万とも知れないどれほど多くの人々が、この国(イタリア)を出て、カナダ、アメリカ合衆国、アルゼンチンに移り住んだか、を想像してみる。向きは逆でこそあるべきだったのに。楽園追放は、まるで儀式でもあるかのように、途切れることなく、繰り返されているのだ。」(Theodor W. Adorno: Luccheser Memorial, in: Gesammelte Schriften, Band 10・1, Frankfurt am Main 1977, S.399)
- (8)Theodor W. Adorno/ Max Horkheimer: Dialektik der Aufklärung, in: Gesammelte Schriften von Horkheimer, Band 5, S.145.  
(徳永恂訳『啓蒙の弁証法』、岩波書店、1990年、187頁)
- (9)Theodor W. Adorno: Kultur und Verwaltung, in: Gesammelte Schriften, Band 8, Frankfurt am Main 1972, S.125
- (10)Adorno/ Horkheimer: Dialektik der Aufklärung, S.161 (邦訳、208頁)
- (11)Adorno: Kulturkritik und Gesellschaft, S.13
- (12)Adorno/ Horkheimer: Dialektik der Aufklärung, S.170 (邦訳、221頁)
- (13)こう言うとき、私は「必要から離陸した欲望」という見田宗介の表現を念頭に置いている。(『現代社会の理論』、岩波書店、1996年、27頁)
- (14)文化の現状を「混沌」ではなく「類似性」と喝破する「文化産業」の章の冒頭の発言からして、再考の余地があるだろう。
- (15)Vgl. Adorno/ Horkheimer: Dialektik der Aufklärung, S.184f. (邦訳、240頁以下)